四川客家方言の代詞の比較研究

王　　春　玲

0．はじめに

四川の客家は明末清初、廣東・福建・江西から移民してきて、すでに300年あまりになる。四川の客家人は長い間客家方言と官話の二重方言状態におかれていたことになるが、両者の間になんらかの影響は生じなかったのであろうか。本稿では實地調査のデータに基づき、代詞を例としてその事を考えてみたい。以下、榮昌縣盤龍鎮・成都市新都區石板灘鎮・資中縣鐵佛鎮・隣水縣冷家郷・儀隴縣樂興郷のデータは筆者の實地調査、成都泰興は『泰興客家話研究』（蘭玉英 2007）、威遠縣石坪郷は『四川境內的客方言』（崔榮昌 2011）による。文獻資料に據ったものの語形は原文の表記に基づく。

まず本稿で扱う四川客家方言の調値を紹介しておきたい[1)]。

表１　調値

	盤龍	石板灘	鐵佛	冷家	樂興	泰興	石坪
陰平	45	45	13	33	33	45	13
陽平	214	13	31	21	11	13	31
上聲	31	31	53	41	53	31	53
去聲	51	53	45	25	13	53	55
陰入	51	3	3	5	5	32	3
陽入	5	5	5		3	5	5

1．人稱代詞

1．1　人稱代詞の單數形：偓、你、佢

表２

	盤龍	石板灘	鐵佛	冷家	樂興	泰興	參考：梅縣
第一人稱	偓[ŋai^{214}]	偓[ŋai^{13}]	偓[ŋai^{31}]	偓[ŋai^{21}]	偓[ŋai^{11}]	偓[ŋai^{13}]	偓[ŋai^{11}]
第二人稱	你[ȵi^{214}]	你[i^{13}]	你[ȵi^{31}]	你[ȵi^{21}]	你[ṇ^{11}]	你[ȵi^{13}]	你[ŋ^{11}]
第三人稱	佢[tɕi^{214}]	佢[tɕi^{13}]	佢[tɕi^{31}]	佢[tɕi^{21}]	佢[tɕi^{11}]	佢[tɕi^{13}]	佢[ki^{11}]

四川客家方言の人稱代詞は單數・複數にかかわらず、主語・目的語の格變化はみられない。語音形式からみると、四川客家方言の各地域の三つの人稱代詞はみな陽平調で、一人稱の“偓”と三人稱の“佢”は基本的に一致する。二人稱代詞の語音形式は[i]・[ȵi]・[ṇ]の三種があり、この三種の語音は同一の形式から變化した可能性がある。一般に所屬の意味を表すとき、人稱代詞に構造助詞の“個[ke]”か“哩[li]”が接續する。

蘭玉英（2007：253-254）は成都泰興の客家方言について、主語と目的語となる場合、人稱代詞は原形と同じ形（“偓[ŋai^{13}]”“你[ȵi^{13}]”“佢[tɕi^{13}]”）で、すべて陽平調だが、人稱代詞が連體修飾語となるときに格變化が起こると指摘する。

ŋa^{45}ke^{31}tan^{53}kɔŋ^{45}t^{h}ɔŋ^{45}e^{45}iau^{31}, tɕi^{45}ke^{31}m̩^{13}hau^{31}sɿ^{31}, iuŋ^{31}ha^{53}tsɿ^{31}ȵi^{45}ke^{31}

偓個擔竿斷誒了，佢個唔好使，用下子你個。

（わたしの天秤棒が折れたが、彼のものは使いにくいので、あなたのものを使わせて）

例文では三つの人稱代詞がすべて陽平調から陰平調に變化し、一人稱の“偓”はさらに韻尾も失っている。この現象は我々が調査した成都石板灘、威遠石坪の客家方言にも存在する。石板灘客家方言の人稱代詞“偓[ŋai^{13}]”“你[i^{13}]”“佢[tɕi^{13}]”は連體修飾語となるときに、低く上昇する陽平調13から陰平調45へ變化し、さらに變化した形式の後に構造助詞“個[ke]”が接續する。

客家方言の代詞の單數形の所有格の由來や性質については、「臨時音變説」（董同龢 1956）、「合音説」（李作南 1965）、「語形變化説」（袁家驊 1989）があり、

嚴修鴻（1999：243-244）は實詞形態素の語彙の合音形式であり、語形變化や内部屈折ではないとする。すなわち人稱代詞と北方方言の複數を表す接尾辭“～家”が合音となり、韻母と聲調が“家”の影響を受けたとする。威遠石坪・泰興の四川客家方言の人稱代詞は連體修飾語となるとき、韻母が變化し、一人稱代詞が韻尾を失うほか、二人稱・三人稱の韻母が變化する。あるいはこの二つの人稱代詞の聲調は接尾辭“～家”の影響を直接受けて陰平調に變化したとも考えられる[2)]。三人稱を例に擧げると、

石板灘：$tɕi^{13}$ + ka^{45}（家）→ $tɕi^{45}$
石坪：$tɕi^{31}$ + ka^{13}（家）→ $tɕi^{13}$

合音説の場合、［tɕi］の韻母は“～家”と合わさっても變容を被らなかったことになる。

１．２　人稱代詞の複數形

四川客家方言の人稱代詞の複數形は比較的複雑で多様である。

表３

方言點	第一人稱複數	第二人稱複數	第三人稱複數
盤龍	偓等［$ŋai^{214}tən^{45}$］	你等［$ŋ̩i^{214}tən^{45}$］	佢等［$tɕi^{214}tən^{45}$］
石板灘	偓們［$ŋai^{13}mən^{45}$］	你們［$i^{13}mən^{45}$］	佢們［$tɕi^{13}mən^{45}$］
鐵佛	偓□[3)]［$ŋai^{31}nɛ^{13}$］	你□［$ŋ̩i^{31}nɛ^{13}$］	佢□［$tɕi^{31}nɛ^{13}$］
冷家	偓等［$ŋai^{21}tən^{33}$］	你等［$ŋ̩i^{21}tən^{33}$］	佢等［$tɕi^{21}tən^{33}$］
樂興	偓等［$ŋai^{11}tən^{53}$］	你等［$ŋ̩^{11}tən^{53}$］	佢等［$tɕi^{11}tən^{53}$］
泰興	偓們［$ŋan^{13}lin^{45}$］	你們［$ŋ̩in^{13}lin^{45}$］	佢們［$tɕin^{13}lin^{45}$］
梅縣	偓等人［$ŋai^{11}$ $tɛn^{45}$ $ŋ̩in^{11}$］	你等人［$ŋ^{11}$ $tɛn^{45}$ $ŋ̩in^{11}$］	佢等人［ki^{11} $tɛn^{45}$ $ŋ̩in^{11}$］

上の表によると、四川客家方言の人稱代詞の複數形接尾辭は“～們”“～等”“～□［ne^{13}］”がある。威遠石坪の客家方言（崔榮昌 2011：468-469）の複數形接尾辭は最も豊富で、“～兜”“～兜人”“～等”“～等人”があり、廣東梅縣方言の複數形と一致する。

石板灘と鐵佛の客家方言の複數形接尾辭“～們”の語音形式“［mən］”は近隣の官話と同じで、官話に由來するものか。筆者が文獻資料によって梅縣・連

城・豐順・平遠・五華・清溪・寧化などの多くの地域の客家方言を調べたところ、これらの地域の複數形接尾辭には“～等”“～兜”“～等人”“～兜人”“～多人”“～儕”などがあることがわかった。そのうち福建長汀の客家方言の複數形接尾辭は“～儕們[□tsʰi meŋ⁰]”、福建連城新泉の客家方言の複數形接尾辭は“～儕[□tsʰi]”である。これによって、“～儕”が長汀の客家方言固有の複數形接尾辭であり、後に官話の接尾辭“～們”の影響を受けて、二つの歴史層の複數形接尾辭が重なった“～儕們”が出現したと推測でき、このような重複した複數形接尾辭の存在は四川客家方言の複數形接尾辭“～們”が官話に由來する可能性を證明する。現在も鐵佛の客家方言に“～□[nɛ^{13}]”と“～們”が共存し、“～□[nɛ^{13}]”は客家方言に固有の複數形、“～們”は四川官話の影響を受けたものであり、兩者はまさに競爭状態にある。

1.3　自分や他人を表す代詞

人稱代詞以外に、四川客家方言の代詞には自分を表す“齊家”と“自家”がある。“齊”と“自”は主に陽平調だが、鐵佛の“自”は陰平調である。他人を表す代詞には“別儕”と“人家”があり、盤龍の客家方言の“別儕[phiʔ^{51}sa^{31}]”は四川の他の客家方言地域の差異が大きい。全體的には、梅縣の客家方言と比べると、自分や他人を表す代詞は客家方言の特色を基本的に保っている。

表4

	自己	大家	別人
盤龍	齊家[tɕʰiː^{214}ka^{45}]	大家[tʰaiː^{31}ka^{45}]	別儕[pʰiːʔ^{51}sa^{31}]
石板灘	齊家[tɕʰiː^{13}ka^{45}]	大家[tʰaiː^{31}ka^{45}]	人家[ŋin^{13}ka^{45}]
鐵佛	自家[tsʰɿ^{13}ka$^{13-31}$]	大家[thai^{53}ka$^{13-31}$] 大自家[tʰaiː^{53}tsʰɿ^{13}ka$^{13-31}$]	人家[in^{31}ka$^{13-31}$]
冷家	自家[tsʰɿ^{21}ka^{33}]	大自家[tʰaiː^{41}tsʰɿ^{21}ka^{33}]	人家[ŋin^{21}ka^{33}]
樂興	齊家[tɕʰiː^{11}ka^{33}]	大齊家[tʰaiː^{53}tɕʰiː^{11}ka^{33}]	人家[ŋin^{11}ka^{33}]
泰興	自家[tɕʰiː^{13}ka^{45}]	大家[tʰaiː^{31}ka^{45}] 大自家[tʰaiː^{31}tɕʰiː^{13}ka^{45}] 盡都[tɕʰin^{53}tiəu^{45}] 大儕[tʰaiː^{31}sa^{13}]	人家[ŋin^{13}ka^{45}]
梅縣	自家[tsʰɿ$^{52/22}$ka^{44}]	盡兜[tsʰin^{52}teu^{44}] 大齊家[tʰaiː^{53}tsʰɛ^{11}ka^{55}]	別人[pʰet^{5}ŋin^{22}] 別人家[pʰet^{5}ŋin^{22}ka^{44}] 人家[ŋin^{22}ka^{44}]

２．指示代詞

２．１　人・物を表す指示代詞

近稱の指示代詞は“底”・“樣”・“□[i^{53}]”の三種の形式があり、遠稱の指示代詞はほぼ“解[kai]”に統一され、多くが陽平調である。

表５

普通話	盤龍	石板灘	鐵佛	冷家	樂興	泰興
這	底[ti^{31}]	樣[iɔŋ^{13}]	□[i^{53}]	底[ti^{41}]	底[ti^{53}]　□[i^{53}]	樣[iaŋ^{13}]　底[i^{31}/ti^{31}]
那	解[kai^{45}]	解[kai^{53}]	解[kai^{13}]	解[kai^{33}]	解[kai^{13}]	個[kai^{53}]　□[i^{53}]

注目されるのは、同一の語義を表す複數の文法形式が共存・共用される現象である。例えば、普通話の“這”を表すものでは、涼水井の客家方言（董同龢 1956：160）に“底[ti^{31}]”と“樣[liaŋ^{13}]”の二つの形式があり、“底”は唐代から指示代詞として用いられている。また成都合興の客家方言（崔榮昌 2011：84）では“□[i^{31}]”と“樣[iaŋ^{13}]”、泰興と樂興の客家方言では“[ti]”と“[i]”が共存し、“[i]”と“[iaŋ]”はおそらく“[ti]”と“[liaŋ]”から聲母が脱落したものと考えられる。石坪の客家方言で遠稱の指示代詞“那”の意味を表すものは三つの文法形式“那[nai^{55}]”“解[kai^{55}]”“□[ai^{55}]”があり、“解”が最も常用され、“那[nai^{55}]”は去聲で成都官話の遠稱の指示代詞“那[nai^{213}]”の去聲と類似する。

２．２　場所を表す指示代詞

多くの四川客家方言地域の場所を表す指示代詞は、指示代詞“底”“解”に接尾辭“子”“樣”などを加えて構成される。

表６

普通話	盤龍	石板灘	鐵佛	冷家	樂興	泰興
這里	底樣 [ti^{31}iɔŋ^{51}]	樣子 [iɔŋ^{13}tsɿ^{31}]	□坨子 [i^{53}t^{h}o^{31}tsɿ^{31}]	底子 [ti^{41}tsɿ^{21}]	底子 [ti^{53}tsɿ^{53}] □子 [i^{53}tsɿ^{53}]	底子 [i^{31}tsɿ^{31}] 底樣 [i^{31}iaŋ^{45}]

普通話	盤龍	石板灘	鐵佛	冷家	樂興	泰興
那里	解樣 [kai^{45}iɔŋ^{51}]	解子 [kai^{53}tsɿ^{31}]	解坨子 [kai^{13}t^{h}o^{31}tsɿ^{31}]	解子 [kai^{33}tsɿ^{21}]	解子 [kai^{13}tsɿ^{53}]	個子 [kai^{53}tsɿ^{31}] 個樣 [kai^{53}iaŋ^{45}] 個只樣 [kai^{53}tsaʔ^{32}iaŋ^{45}]

四川官話の場所を表す指示代詞は語尾の“子”がなく、客家方言との差異が大きい。

２．３　時間を表す指示代詞

成都方言の時間を表す指示代詞には“這陣（子）[tse^{213}tsən^{213}（tsɿ^{53}）]”“那陣（子）[na^{213}tsən^{213}（tsɿ^{53}）]”“這下兒[tse^{213}xər^{55}]”“那下儿[na/$^{4)}$ ne/nai^{213}xər^{55}]”がある。四川客家方言の時間を表す指示代詞にも“子”“兒”の二種を語尾とするものがあり、單純指示代詞の後に“下兒”“下子”を加えて構成される。例えば鐵佛と冷家の客家方言は“～下兒”、石板灘と盤龍の客家方言は“～下子”である。ここでは表を擧げない。

２．４　程度を表す指示代詞

表７

普通話	盤龍	石板灘	鐵佛	冷家	樂興	泰興
這麼	咁樣（子） [kɔn^{31}iɔŋ^{51}]	咁門 [kɔn^{53}mən^{45}]	咳樣子 [an^{53}iɔŋ^{45}tsɿ^{31}] 咳門子 [an^{53}mən^{45}tsɿ^{31}]	咁麼 [kɔn^{41}mo^{33}]	咁樣（子） [kɔn^{53}iɔŋ^{53}]	咁（門） [kan^{53}mən^{45}]
那麼						

上の表から、普通話の“這麼”“那麼”に相當する語が四川客家方言では同一の文法形式で表され、すなわち程度を表す指示代詞には近稱と遠稱の區別がないことがわかる。梅縣の客家方言（林立芳 1999：190）の“咳[an]”、福建清流の客家方言（項夢冰 1999：218）の“□[kaŋ^{55}]”、中山の客家方言“咁[kan^{21}]”にもこのような用法がみられ、程度を表すときに距離の遠近を區別しない。四川客家方言は代詞語根“咁”“咳”を保ち、“咳”はおそらく“咁”の聲母が脱

落したものと考えられる。しかし梅縣などの客家方言と比較すると、四川客家方言の“咁”“咴”は單獨の指示代詞として用いられず、その後に“～樣（子）”“～子”“～門（子）”が接續する必要がある。成都方言の程度を表す指示代詞は“這麼”“那麼”である。張一舟、張清源、鄧英樹（2001：229）は、“這”“那”“麼”には音聲變化形式があり、“麼”には［mo^{55}］［mən^{55}］の二つの形式があり、“［mən^{55}］”は“門”とも表記されるとしている。本稿では字音によって“門”の表記を採用した。

3．疑問代詞

3．1　人・事物についてたずねる疑問代詞

梅縣の客家方言（林立芳 1999：192）の、人についてたずねる疑問代詞は“瞞人［man^{31}ȵin^{22}］”“奈儕［nai^{52}sa^{22}］（または艾儕［ŋai^{52}sa^{22}］）”があり、新派は“瞞人”、老派は“奈儕”“艾儕”を常用する。事物についてたずねる疑問代詞は“脈個［mak^{1}ke^{52}］”がある。四川客家方言の人と事物についてたずねる疑問代詞は梅縣の客家方言とほぼ近い。

表8

普通話	盤龍	石板灘	鐵佛	冷家	樂興	泰興
誰	哪人［la^{51}ȵin^{31}］ 奈只［lai^{51}ʦa^{51}］	奈只［nai^{53}ʦa^{31}］	脈人［mai^{53}ȵin^{31}］	奈人［nai^{41}ȵin^{21}］	脈人［mai^{53}ȵin^{11}］	哪人［la^{31}ȵin^{13}］ 哪儕［lai^{31}sa^{13}］ 哪只子［lai^{31}ʦaʔ^{32}ʦɿ^{31}］
哪（指物）	哪／奈［la^{51}/lai^{51}］	奈［nai^{53}］	哪／奈［na^{53}/nai^{45}］	奈［nai^{41}］	脈［maʔ^{33}］	哪［la^{31}］
什麼	乜個［meʔ^{51}ke^{31}］	奈個［nai^{53}kɛ^{31}］	脈個［maʔ^{3}kɛ^{31}］	乜個［mɛʔ^{5}kɛ^{21}］	脈個［maʔ^{33}kɛ^{11}］	脈個［maʔ^{32}ke^{53}］

普通話の“誰”に相當する文法形式には、四川客家方言では“脈人”“奈人”“哪人”“奈只”などの形式があり、語音は［mai］と［nai/lai］に集中する。“奈”は普通話の“哪”に相當し、“人”と接續するほかに、物や場所についてたずねる要素とも接續し、疑問代詞“奈個”“奈子”“奈樣”を構成する。盤龍と鐵佛の客家方言には“哪”と“奈”があり、兩者は語義と用法が同じで自由に交

換できる。“哪”の語音は“奈”の韻尾が脱落したものか、あるいは官話の“哪[la/na]”に由來するものかははっきり斷定できない。

石板灘の客家方言の“奈只”は人についてたずねるのにも、事物についてたずねるのにも用いることができる。例：“奈只來了？（誰が來たか）”、“奈只杯子？（どのコップか）”。崔榮昌（2011：469）は威遠石坪の客家方言の人についてたずねる疑問代詞には五種の形式が共存するという（哪個[nai^{53}kɛ^{55}]、哪個人[nai^{53}kɛ^{55}ŋ̍in^{31}]、乜人[maʔ^{3}ŋ̍in^{31}]、哪下[nai^{53}ha^{13}]、哪下人[nai^{53}ha^{13}ŋ̍in^{31}]）。“哪下”は中山の客家方言（甘甲才 2003）の“那霞[na^{55}ha^{21}]”と語音が近く、同じ語が地域によって音聲變化した可能性がある。

３．２　場所・數量・原因についてたずねる疑問代詞

場所・數量・原因についてたずねる疑問代詞は四川客家方言では語形が比較的統一されている。

表９

普通話	盤龍	石板灘	鐵佛	冷家	樂興	泰興
哪里	奈樣[lai^{51}iɔŋ^{51}]	奈子[nai^{53}tsɿ^{31}]	奈坨子[nai^{45}t^{h}o^{31}tsɿ^{31}]	奈子[nai^{41}tsɿ^{21}]	奈子[nai^{53}tsɿ^{53}]	哪子[lai^{31}tsɿ^{31}]
多少	好多[hau^{31}to^{45}]	好多[hau^{31}to^{45}]	好多[hau^{53}to^{13}]	好多[həu^{41}to^{33}]	好多[həu^{53}təu^{33}]	好多[hau^{31}to^{45}] 几多[tɕi^{31}to^{45}]
爲什麼	爲／做乜個[uei^{51}tso^{51}meʔ^{51}ke^{31}]	啷門（子）[niɔŋ^{53}mən^{45}tsɿ^{31}] 做奈個[tso^{53}nai^{53}kɛ^{31}]	爲／做脈個[uei^{45}/tso^{45}maʔ^{3}kɛ^{31}]	爲／做乜個[uei^{25}/tsu^{25}mɛʔ^{5}kɛ^{21}]	爲／做脈個[uei^{13}/tsəu^{13}maʔ^{3}kɛ^{11}]	做脈個[tso^{53}maʔ^{32}ke^{53}]

場所についてたずねる疑問代詞は、梅縣の客家方言では“奈里[nai^{52}le^{22}]”（あるいは艾里[ŋai^{52}le^{22}]）“奈滴[nai^{52}tit^{1}]”（あるいは艾滴[ŋai^{52}tit^{1}]）である。四川の石板灘・冷家・樂興などの地域では“奈子”だが、盤龍の客家方言だけ“奈樣[lai^{51}iɔŋ^{51}]”である。

數量についてたずねる疑問代詞はみな“好多”を用い、梅縣の客家方言の數量についてたずねる疑問代詞“詰多[kit^{1}to^{44}]”“詰多欸[kit^{1}to^{44}e^{22}]”との差異が大きく、一方四川官話の對應する疑問代詞“好多”と語音形式が近い。泰興の客家方言では場所についてたずねる疑問代詞“好多”“几多”が共存・共用され、“好多”は四川官話に由來し、“几多”は客家方言固有の代詞が殘ったものである。

原因についてたずねる疑問代詞は“爲／做乜個”“爲／做脈個”“乜個”“脈個”が普通話の“什麼”に相當する。

３．３　状況・方式についてたずねる疑問代詞

普通話の状況･方式についてたずねる疑問代詞は“怎麼”“怎樣”“怎麼樣”だが、四川客家方言では主に疑問代詞“啷門”で表す。“啷門”の“啷”は假借字であり、本字は待考とする。“啷”の語音は地域によって異なるが、字形は“啷”に統一されている。

表10

普通話	盤龍	石板灘	鐵佛	冷家	樂興	石坪
怎麼 怎樣 怎麼樣	啷門 [lɔŋ^{45} mən^{45}]	奈個樣 [nai^{53}kɛ^{31} iɔŋ^{53}] 啷門（子） [niɔŋ^{53} mən^{45}tsɿ^{31}]	啷門子 [nɔŋ^{53}mən^{45} tsɿ^{31}]	啷門子 [nɔŋ^{41}mən^{33}tsɿ^{21}]	啷門 [lɔŋ^{53}mən^{11}]	釀門子 [ȵioŋ^{55}mən^{55}tsɿ^{0}]

威遠石坪の客家方言の“釀門”の“釀[ȵioŋ]”は、梅縣の客家方言（林立芳 1999：199）の對應する疑問代詞“樣誒[ȵioŋ^{52}ŋe^{22}]”“樣般[ȵioŋ^{52}pan^{44}]”の“樣[ȵioŋ]”と聲母・韻母が一致するが、“釀門子”の構成要素“門子”は四川官話に由來する可能性があり、四川の多くの官話地域に“啷門子”という疑問代詞がある。石坪の客家方言の“釀門子”は客家方言と四川官話が結合して生まれた疑問代詞と推測できる。鐵佛・冷家・樂興の客家方言の“啷門子”は官話の“啷門子”と語音が近く、用法も同じである。

4．まとめ

以上のように、四川客家方言は長い間二重方言状態にあったため、基本的には固有の姿を保っているものの[5)]、四川官話の影響を受け、官話要素と客家方言固有の要素が共存する現象が見られるようになった。例えば、泰興の客家方言の、數量についてたずねる代詞には“几多”“好多”が共存しているが、“几多”は客家方言固有の疑問代詞であり、“好多”は四川官話に由來する可能性が高い。また、言語接觸の結果、一種の混成語が生まれた。例えば石坪の客家方言の“釀門子”の“釀”は客家方言本來の要素、“門子”は四川官話に由來、また“偓們”“你們”“佢們”の“偓”（“你”）“佢”は客家方言、接尾辭“們”は官話に由來すると推測される。

注）

1）多くの方言地域では陰入と陽入の混亂があり、また一部の入聲字の聲門閉鎖音韻尾が脱落して、ほかの調類に入る。

2）この觀點は早稲田大學文學學術院の古屋昭弘教授のご教示による。

3）「□」は字形を持たない語を示す。

4）使用可能例が複數ある場合、／で區切って示す。

5）代詞の體系は借用されにくいという説もある。陳保亞 1996はそのことについて「代詞形態素と一般の語を構成する形態素が同一の語義層にないことと關連があるかもしれない」（p124）という。

参考文献

陳保亞　1996『論語言接觸與語言聯盟』、語文出版社。
崔榮昌　2011『四川境內的客方言』、巴蜀書社。
董同龢　1956『華陽涼水井客家話記音』、科學出版社。
甘甲才　2003「中山客家話代詞系統」、『華南師範大學學報』第３期。
蘭玉英　2007『泰興客家方言研究』、中國社會科學出版社。
李作南　1965「客家方言的代詞」、『中國語文』第３期。
林立芳　1999「梅縣方言的代詞」、『代詞』（李如龍、張雙慶主編）、暨南大學出版社。
項夢冰　1999「清流方言的代詞系統」、『代詞』（李如龍、張雙慶主編）、暨南大學出版社。
嚴修鴻　1999「客家方言人稱代詞單數“領格”的語源」、『代詞』（李如龍、張雙慶主編），暨南大學出版社。
袁家驊　等　1989『漢語方言概要』（第二版）、文字改革出版社。

張一舟、張清源、鄧英樹　2001『成都方言語法研究』、巴蜀書社。

言語資料の説明

文中の言語資料は筆者の實地調査によって得たものである。調査地域とインフォーマントの情報は以下の通り：

重慶市榮昌縣盤龍鎮大建村楠木五組：周順清、男、1940年６月生、小學卒、農民。

成都市新都區石板灘鎮黄果村二組：鐘成林、男、1945年１月生、初中卒。大工［木匠師傅］、農民。

四川資中縣鐵佛鎮柏龍村（原石堰村三组）：王洪永、男、1948年10月生、高小卒、石堰村の村支部の書記を17年勤めた。

四川隣水縣冷家鄕大坪村：劉正權、男、1954年10月生、初中卒。大工、農民。

四川儀隴縣樂興鄕三跳石村五組：陳海容、女、1966年７月生、初中卒、農民。

謝辭：本論文の日本語譯に當たっては、早稻田大學大學院博士課程の高山亮太氏のお世話になりました。心より感謝申し上げます。

附記：本論文は「中國教育部人文社科青年基金項目“語言接觸視角下四川沱江流域客家方言與毗隣帶官話語法比較研究”（12YJC740098）、重慶市社科項目（2012YBWX089）、西南大學中央高校基本科研業務費專項資金資助（SWU1209307）」の成果の一部である。

＊　＊

作　者：王　春玲

Author：WANG Chunling

標　題：四川客家方言代詞比較研究

Title：A Comparative Study of the Pronouns in Si chuan Hakka 四川客家 Dialect

摘　要：客家方言隨客家移民入川已有300多年，其代詞系統至今仍保留了原有基本面貌。但由於客家方言長期處於雙方言環境中，受四川官話影響，代詞系統存在來自官話成分和原有成分並存並用現象。

關鍵詞：客家方言　四川官話　代詞系統　比較